

1. 地域の概要

(1) 地理的位置

表 地理的位置

国名及び地域	ヨーロッパ イベリア半島南西部（スペイン及びポルトガル）
経緯度	おおよそ北緯 37 度～41 度、西経 4 度～8 度の範囲

(2) 自然環境（地形、気候、植生及び土壌等）

- ・デエサ（dehesa）は、スペイン及びポルトガルの山岳地帯（中央高地及びシエラモレナ山脈）の山麓丘陵及び緩斜面に加え、平坦地にまで広がっている。デエサが分布する標高帯は約 2000m の高地から海面近くにまで及んでいる。
- ・これらの地域は、ケッペンの気候区分では Cs（地中海性気候）に分類されている。夏は暑く乾燥し、冬は寒く湿潤である。
- ・デエサは、森林と草地が垂直的に組み合わさっている二次的自然である。森林はコルクガシ、ホルムガシ、トキワガシなどが優占しており、その下層の草本は厳しい気候と低い地力に適応した種で構成される。
- ・樹木層は乾性硬葉樹林が斑状に分布している。樹木の密度は 1ha 当たり 20～100 本程度、樹冠被覆率は 10～50% 程度である。樹木は微気象の緩和に大きな役割を果たしており、樹陰の生物多様性を増加させている。
- ・草本層は季節に応じて変化し、生産力は小さいが種数は豊富である。また、低木層は、耕作や放牧によって制御されるか又は排除されてしまうため、ほとんどの場所で欠けている。
- ・土壌は栄養に乏しく、表土は薄い。保水力に乏しいため、耕種農業は著しく制限される。

(3) 社会的背景

- ・デエサが分布する地域は、農業及び牧畜を主体とする農村地域である。
- ・地域内にはバダホス（人口約 140,000 人）、カセレス（人口約 90,000 人）、プラセンシア（人口約 40,000 人）などの中小規模の都市が分布する。デエサの歴史は定かではないが、本地域における農林業生産の歴史は、はるかローマ帝国時代にまで遡ることができる。
- ・スペイン及びポルトガルでは、20 世紀後半以降の工業化に伴い、若年層を中心とした労働人口が農村から半島中央部及び海岸部の工業都市に流出し、その結果として農村は人口減少及び高齢化が進んでいる。
- ・このような産業構造の転換や人口構造の変化に伴い、農村部と都市部との経済格差が社会問題の一つとなっている。

2. 地域の自然資源の利用・管理の実態

(1) 自然資源の利用・管理の経緯と現状

- ・デエサは何世紀にも渡る歴史を有しており、農村経済と自然保護及び生物多様性保全との統合に成功してきた。デエサは大規模な家畜生産を主目的としており、他の自然資源利用は補足的なものである。
- ・家畜はデエサに放牧され、草本や低木を食べて成長する。家畜の種類は豚、牛、羊など様々である。
- ・飼料の調達と草本層への低木の侵入抑制を目的として、2～5年ごとに草刈りが行われる。家畜生産量は 1,200 ～1,800 kg/ha/年程度である。
- ・デエサの樹木は、燃料、コルク及び豚が食べるオートドングリの生産に利用されている。木材の収穫量は 200～400 kg/ha/年程度である。
- ・かつては食糧調達のために狩猟が行われていたが、1960 年代以降は観光産業として行われており、赤鹿、イノシシ、ノウサギ、ウズラ等が捕獲されている。

(2) 自然資源の利用・管理の問題点及び生物多様性への影響

- ・ここ数十年の間に、デエサは質・量ともに衰退している。
- ・乾期の長期化と最近のストレスによって、樹木の集団枯死が引き起こされている。
- ・1950 年代の飢饉の際に、デエサの樹木が伐採されて農地に転換され、さらにその後、アフリカブタコレラによって黒イベリコ豚が急激に減少したことにより、デエサの環境が維持できなくなり、農地への転換に拍車がかかった。
- ・近年は、ワインのコルク栓としてスクリュウキャップまたはガラス栓が利用されるようになり、コルクの需要が落ち込んでいるため、建築資材に向く樹木や農地への転換が進行している。

(3) 上記問題点の解決に向けた地域計画等

(既往資料から把握することはできなかった。)

3. 取組事例の詳細

(1) 取組事例の全体像

デエサの利用・管理は伝統的な農林業の営みそのものであり、その内容は既に「2. 地域の自然資源の利用・管理の実態」で述べた通りである。

(2) SATOYAMAイニシアティブの「5つの視点」から見た自然資源の利用・管理の詳細

本事例と5つの視点の主な関係は、次頁表に示すとおりである。

表 本事例と5つの視点の主な関係

5つの視点	本事例との関連
1) 環境容量・自然復元力の範囲内での利用	・デエサの景観は、適度な密度の家畜飼育による草及び低木の摂食、低木層の発達を抑制するための人間による管理、樹木の生長量の範囲内での伐採など、自然復元力の範囲をわきまえた自然資源の持続可能な利用・管理によって維持されている。 ・長年に渡るデエサの継承を通じて、伝統的な家畜種（黒イベリコ豚、羊、牛等）の遺伝子が保全されている。 ・デエサは、イベリアカタジロワシ、クロハゲワシ、ナベコウ、イベリアオオヤマネコなどの希少種の生息地となっている。 ・デエサの不連続な森林構造は、山火事と土壌流出を減少させている。
2) 自然資源の循環利用	・デエサで生産される畜産物や木材等の利用によって排出される温室効果ガスは、デエサにおける家畜や森林の再生産によって吸収されるため、差し引きゼロとなる（カーボン・オフセット）。
3) 地域の伝統・文化の評価	・デエサにおける林畜複合システムの持続可能性と効率性は、何世紀もの間、生態系が安定的に継承されていることによって示されている。
4) 多様な主体の参加と協働	・カシ林のドングリや下草などの伝統的な利用は、地元の共有の権利として営まれてきた入会権である。林地は狩猟物を含む非木材林産物を持続的に収穫できるように管理されてきた。
5) 地域社会・経済への貢献	・デエサにおける主要な生産物であるイベリコ豚は、地域の食文化を語る上で書かせない存在である。また、近年ではその肉質の高さが世界中で広く知られるようになり、海外にも輸出されている。 ・この地方でも農林業の衰退によりカシ林の減少の恐れがあるが、イベリコ豚への高い需要は、伝統的景観を次世代へ伝承する可能性を提示している。

以上

参考文献等

- ・ 社団法人千葉県畜産協会養豚部. 2008
(URL: http://www.np-chiba.jp/shouhisha/y08_02/index.htm)
- ・ U. Fra Paleo, “The dehesa / mantado landscape”, 2009